

だれしもみな、日々の生活において遭遇するすべてについて信仰にもとづいて判断しているわけではないと思えます。朝にご飯と味噌汁にするか、パンとサラダ、コーヒー牛乳にするか、はたしてどちらが信仰的に正しいだろうか、とか、テレビのニュース番組をみるかドラマを観るかなど、どちらでもよいことごとくしょう。職場の上司や部下に対する態度、学校の授業で眠気が襲ってきた時、ひとつひとつを神との関わりにおいて判断しているわけではありません。

しかし、少なくともわたしたちは、日々遭遇する問題に対してその場で状況を正しく認識し、正しく判断することができるとよいものだと願っているでしょう。おそらくこのように一見宗教とは全く関係がないかのようにみえる領域でも、自分や家族みんなが守られて、わが身に降りかかる難しい問題を解決し、友を助け、日々をいかにによりよく生きるかという問題が多くを占めているのではないのでしょうか。

知恵というのは、まぎれなくいつどこに深く関わるものであり、旧約聖書ではこの知恵が神に与えられるのだと説いています。(特に箴言やコヘレト)

箴 1・7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも論しをも侮る。

箴 2・6 知恵を授けるのは主。主の口は知識と英知を与える。

箴 23・1 支配者と共に食卓に着いたなら／何に直

面しているのかをよく理解せよ。

- あなたが食欲おうせいな人間なら／自分の喉にナイフを突きつけたも同じだ。
- 供される珍味をむさぼるな、それは欺きのパンだ。
- 富を得ようとして労するな／分別をもって、やめておくれがよい。
- 目をそらすや否や、富は消え去る。鷲のように翼を生やして、天に飛び去る。

このような我が身を守るための戒めから、生死に関わる問題にまで、知恵ある言葉はひとを救います、そういう言葉はだれにでも与えられることがあります。ひとつ具体的な事例をあげますと：

フランクが強制収容所で体験したことの紹介ですが：…わたしは(そこで)自殺した女性の遺体を看たことがあります。彼女の身の回り品の中には、自筆の紙切れがありました。(それには)「書かれていました(運命よりも力強いものは、それに耐える勇気である)」と。

ところが、知恵ある言葉をもって正しく認識することができても、それを実現する力がなければ、敗北するのです。想像を絶する逆境を耐えて生還できた時には、ひととは奇跡を実現する力を獲得しているといえるのでしょう。

イエスは、故郷の会堂で教えた時、ひとびとにさういう知恵と力を兼ね備えたひとだとみなされたようです。会堂にいた人たちは驚いて言います。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろうか」と。

53 イエスはこれらのだとえを語り終えると、そこを去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろうか」。

しかし彼らの驚きは、単に尊敬からくるものではなく、自分たちの心情を投影したものだということです。その心情のうちひとつは「わたしは、しがたない、取るに足らない、ガリラヤの人間だ」。そして「ガリラヤの人間はみなだれもおなじようなものだ」という自己卑下の理解です。今の言葉で言い換えると自己肯定感が低いという心情です。

ヨハネ7・41 「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアはガリラヤから出るだろうか。42 メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」

そして、もう一つは職業に対する偏見か父親がいない家庭への偏見です。彼らはイエスを、習慣にしたがって「ヨセフの子」とは呼ばずにあえて「大工の息子」と呼ぶのです。大工という職業を見下げているので、控えめながらイエスを貶めるためにさう呼んだのでしょう。

さらには、イエスの家族、母マリアは夫ヨセフを早くに亡くしたのかもしれない。だから「ヨセフの子」とは呼ばずに、早くから父の家業を継いだイエスを「大工の息子」と呼んだのかもしれない。さうならばマリアは夫を亡くしたうえに5人の息子と母親で貧しい家庭だったために十分な

勉強ができなかったとも考えられます。

55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアと  
いい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではな  
いか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるで  
はないか。この人はこんなことをすべて、いったい  
どこから得たのだろうか。」

具体的にイエスの家族がどうい歴史をたどったのかは  
分からないのですが、人々がイエスを預言者として受け入  
れることができない根拠はわかります。つまり、彼らが親の  
職業により、家族構成やその関わりによってのみ、イエスを  
理解しようとするのです。

そのようにひとをして、家族の構成、出自はどこか、どこ  
に所属するか、環境によってのみ、ひとびとはイエスを理解  
しようとする(還元主義という)のです。この態度は、イエ  
スをはじめ自分以外の外側に向けられると共に自分自身に  
も向けられます。おそらく彼らはガリラヤ地方に誇りを持  
てなかった、そして自分自身についてさき外から見、職業  
から観る、社会の中心エルサレムから観る、そのため誇りを  
持てなかったのだと思われれます。

ひとびとは、最高の教育を受けた一部の傲慢なラビの眼  
から、自分自身を観る、そしてこう理解する…「彼らはブラ  
スでガリラヤにいる自分たちはマイナスだ」と。彼らは、エ  
ルサレムの神殿に仕える一部の傲慢な祭司の眼から、自分  
たちを観る、自分の故郷ガリラヤを観る、「エルサレムはブ  
ラスだ、ガリラヤはマイナス、である」と、信じ込む。彼らは  
律法の誤った解釈によって自分自身を観る、「豊かで、十分

な教育、円満な家族・だけがプラスで、そうでない逆境をマ  
イナスだ」と観る。彼らはイスラエルの伝統により、ナザレ  
を観る、「救い主はエツレヘムに生まれる、ナザレから何の  
良いものが出ようか」と、だからイエスを蔑む。

だからといって、イエスは、そういうひとたちを否定され  
なかった。むしろこう言われた、「心の貧しい人たちは幸い  
である」と。「天の国は、そういう人たちのものである」。

自分自身はしががない大工の息子だけれども、その蔑み以  
上の蔑みをご自分の誕生が告知されたとき、母マリアもか  
つて受けた。父ヨセフは一度は離縁しようとしたが、思いと  
どまって母マリアと蔑みのまなざしを共に甘んじて受け、  
堪えた。屈辱を乗り越えて、母は神を賛美して歌を歌った。  
その歌が数千年後にまで歌い嗣がれるとは思ひもしなかつ  
ただろう。

イエスは、父の仕事が大工であることを誇りだと確信し  
ただろう。無言のうちに木を刻む匠の技をとおして、神の国  
がいかにして造られるかを語るに十分な思慮深い時を与え  
たであろう。後にヨセフの仕事にもとづいて讚美歌がつく  
られ、数知れないひとがその歌を口ずさむとは想像だにで  
きなかっただろう。

箴 22・9 寛大な人は祝福を受ける／自分のパンを  
さいて貧しい人に与える。

イエスは、母をとおして、父をとおして、屈辱を知り、蔑み  
を知るがゆえに、知恵の言葉を言い換える。により力ある言  
葉を宣教の開口一番こう語った「心の貧しい人たちは幸い

である」、「悲しむひとたちは幸いである」、「…。これがイエス  
の律法なのです。

57 このように、人々はイエスにつまずいた。イエ  
スは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の  
間だけである」と言い、58 人々が不信仰だったの  
で、そこではあまり奇跡をなならなかった。